様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年２月１０日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007～2009
課題番号：19530110
研究課題名（和文）
近代イギリスにおける政治的賢慮概念の展開—諷刺文学の政治思想史的研究—
研究課題名（英文）
The Development of the Concept of Political Prudence in Modern Britain: A Study of Satire in the Perspective of History of Political Thought

研究代表者
岸本　広司（KISHIMOTO HIROSHI）
岡山大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：20186216

研究成果の概要（和文）：
本研究課題では、近代イギリスの諷刺文学において政治的賢慮概念がどのように展開されたかを政治思想史的に考察した。その結果、(1)イギリスのオーガスタン時代は諷刺文学が栄える政治的・社会的・文化的条件がそろっていたこと、(2)諷刺とは社会的な文学様式であり、その本質は笑いを武器にした諷刺対象の道徳的・政治的矯正に他ならなかったこと、(3) J・スウィフトに代表されるこの時代の諷刺文学は、民衆の臆見や政治的知恵を文学的に表現したものであり、そこには非政治的人間の賢慮が豊かに包蔵され展開されていたことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
In this research project, I studied the development of the concept of political prudence in the modern British satire from the viewpoint of history of political thought. This study revealed the following three points. (1) In the Augustan Age of Britain, there were political, social, and cultural conditions which prompted satire. (2) The satire took a social literary form, and its purpose was to rectify satirized people morally and politically by making full use of laughing at them. (3) People's opinions and political wisdom found expression in the satire of this period, a representative of which is Jonathan Swift. The literature involved much political prudence of non-political men.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２００８年度	700,000	210,000	910,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：政治学・政治学
キーワード：近代イギリス政治思想史、政治的賢慮、実践哲学、諷刺文学、オーガスタン時代、Ｊ・スウィフト、Ｈ・フィールディング

１．研究開始当初の背景

(1) 研究者は、政治学と倫理学の内的結合を回復し、政治学を規範学として再生せしめようとする実践哲学、なかんずく、「政治的賢慮」(political prudence)の復権を長年の研究課題としてきた。この課題を探究するために、まず 18 世紀イギリスのＥ・バークを取り上げ、バークの政治思想の本質が政治的賢慮の実践であったことを明らかにした。次いで、近代イギリスにおける政党概念の政治思想史的研究に取り組み、政党概念の生成・変容過程を跡づけながら、政党とは、実は近代における政治的賢慮概念の一変容形態であり、賢慮の制度的具象化にほかならなかったことを明らかにした。

(2) 以上の研究から、研究者は、オーガスタン時代のイギリスで隆盛した諷刺も、実は政治的賢慮概念の変容形態であり、民衆レベルでの実践知の表現であったのではないか、との着想を得た。すなわち、バークの政治思想や政党論に見られる賢慮概念が、きわめて限られた政治主体＝政治的国民の賢慮であったのにたいして、近代イギリスとりわけオーガスタン時代の諷刺文学は、いまだ言論の自由を与えられていない一般民衆の臆見や政治的知恵をレトリックと文学的装いを纏って表現したものであり、そこには非政治的人間の暗黙の実践知＝賢慮が包蔵され展開されているのではないか、しかしこれまでこうした観点からの考察は、わが国はもとより海外においても皆無であり、研究課題として取り組む必要性があるのではないか、と考えるにいたった。これが、本研究課題の申請時における背景・動機である。

２．研究の目的

本研究は、近代イギリスとりわけオーガスタン時代の諷刺文学に着目し、「諷刺」(satire)それ自体が政治的賢慮概念の展開にほかならなかったことを明らかにする。具体的には、諷刺の本質、諷刺と賢慮の概念的連関性、寛容論やレトリック論との関わり等を、歴史的コンテクストを重視しながら政治思想史的に分析し解明することを目的とする。本研究は、近代イギリスの諷刺文学をアリストテレスにつながる実践哲学の伝統のなかに位置づけ、諷刺を文学知としてのみならず、実践知の一つとして捉え直すことによって、近代イギリスにおける政治的賢慮概念の展開を政治思想史的観点から明らかにする。

３．研究の方法

(1) まず現有の文献を利用して研究に着手し、問題点を明確にした。本研究課題の方法は文献主体で、テクストの正確な読解および政治的言説の解明を中心とするところから、主要設備として、イギリス政治思想史・政治史・社会史・諷刺文学等の関係図書を収集した。重要な一次文献は復刻版が出てきているとはいえ、政治的言説に関する歴史的研究を特徴とする本研究にとって、テクストが第２版、第３版でどのように改訂され、政治的言説がどのように変容しているかを調べるのはきわめて重要である。そこで、国内の大学図書館、とりわけ Early English Books Online (EEBO) とEighteenth Century Collections Online (ECCO) を所蔵している早稲田大学附属図書館等へ出張して、第一次資料の収集を行った。

(2) 先行研究を整理して問題点をさらに明

確にするとともに、収集した政治的小冊子、ビラ、バラード、諷刺詩などのパンフレット類、新聞・雑誌等の記事、本研究課題の遂行に最も重要な第一次資料であるＪ・ドライデン、Ｊ・スウィフト、Ａ・ポープ、Ｊ・ゲイ、Ｊ・アーバスノット、Ｈ・フィールディングたちの諷刺作品を丹念に読解した。そしてそれら諸資料の読解をとおして、何がどのように諷刺されているか、オーガスタン時代の諷刺文学はいかなる政治的・社会的背景のもとで成立したか、そもそも諷刺の本質とは何か、そしてそれら諷刺はいかなる政治思想史的意義を有しているかについて考察し、その成果を論文としてまとめていった。

４．研究成果

(1) イギリスで諷刺文学が最も隆盛したのは１７世紀後半から１８世紀前半のオーガスタン時代においてであるが、本研究の導入として、まずこの時代の特徴を考察し、諷刺が栄えた政治的・社会的・文化的条件を明らかにした。考察の主題は、①政治的安定性と不安定性、②自由と不自由、③理性と科学的精神、④ジャーナリズムの成立等についてである。これらの主題については、William A.Speck, *Stability and Strife* (1977)；N.McKendrick, J.Brewer and J.H.Plumb, *The Birth of a Consumer Society* (1982); Kathleen Wilson, *The Sense of the People* (1995)；B.W. Young, *Religion and Enlightenment in Eighteenth-Century England* (1998)；Julian Hoppit, *A Land of Liberty ?* (2000)；Hannah Barker, *Newspapers, Politics and English Society* (2000)などの優れた研究書が出ており、それらを参考にしながら研究を進めた。その結果、オーガスタン時代は諷刺が隆盛する格好の時代であったことが明らかとなった。

(2) 次いで、オーガスタン時代の最初期の文人であるＳ・バトラーとＪ・ドライデンの諷刺概念を、古代の概念と比較しながら考察した。取り上げたテクストは、*The Elephant in the Moon* (1759)；*Hudibras* (1662-78)；*Absalom and Achitophel* (1682)；*The Medall* (1682)；*Mac Flecknoe* (1682)；*Discourse concerning Satire* (1693)である。これらのテクストのうち、とくに重視したのはドライデンの *Discourse concerning Satire* である。これは、諷刺の語源と誕生、諷刺の文体や道徳的機能などを多面的に論じており、スウィフトに先行する諷刺論としてきわめて重要である。研究者はこのテクストを丹念に読み、ドライデンにおいて諷刺は文学知としてのみならず、実践知としても捉えられていたことを解明した。それとともに、諷刺とは社会的文学様式であり、その本質は、諷刺的笑いを武器にした諷刺対象の道徳的・政治的矯正に他ならなかったことを明らかにした。

(3) 以上の研究に引き続いて、オーガスタン時代の代表的な諷刺作家であるスウィフト、ポープ、ゲイ、アーバスノットを考察対象とし、彼らにおけるスクリブレルス諷刺の本質を解明した。とりわけ注目したのはスウィフトである。スウィフトの諷刺の本質を捉えるために、彼の諸著作を歴史的コンテクストを重視しながら分析し、スウィフトの諷刺から政治的賢慮概念とその政治的含意析出の作業を行った。あわせて、アリストテレス以降の政治的賢慮の伝統とスウィフトの諷刺文学との思想的連関性を探り、スウィフトにおける実践哲学的性格を明らかにした。分析したテクストは、*Discourse of the Contests and Dissentions between the Nobles and the Commons in Athens and Rome* (1701)；*A Tale of a Tub, The Battle of the Books*

(1704) ; *Predictions for the Year 1708* (1708) ; *The Accomplishment of the First of Mr. Bickerstaff's Predictions* (1708) ; *A Vindication of Isaac Bickerstaff, Esq.* (1709) ; *The Publick Spirit of the Whigs* (1714) ; *Drapier's Letters* (1724-25) ; *Gulliver's Travels* (1726) である。なかでも、これまでほとんど無視され、研究対象とされてこなかった「ビッカースタッフ・ペーパーズ」(Bickerstaff Papers)を重点的に取り上げ、スウィフトの諷刺の特徴およびその本質の解明に努めた。

「ビッカースタッフ・ペーパーズ」とは、占星術師で暦作家のジョン・パートリッジをパロディの技法を駆使して諷刺した一連の作品のことであるが、作品分析の結果、以下のことがわかった。すなわち、スウィフトはこれらの作品のなかでパートリッジの懐深く入り込み、いわばパートリッジになりすましてその本人を攻撃している。正面からではなく側面から、あるいは背面からの攻撃である。あたかも攻撃的擬態生物のように、騙しのテクニックを駆使しつつ相手をからめとり、ついには骨の髄まで食い尽くす。そして平らげた後は、何食わぬ顔をして平然としている。それこそがスウィフト流の諷刺である。研究者は、「ビッカースタッフ・ペーパーズ」にはスウィフトの諷刺の特徴が最も顕著にあらわれていることを作品の丹念な読解と緻密な分析をとおして解明した。

それとともに、パートリッジを諷刺しなければならなかったスウィフトの意図を探究した。似非科学としての占星術を批判するところにその意図があったことは明白であるが、スウィフトがそれ以上に問題にしたのは、実はパートリッジの宗教的熱狂と民衆扇動であった。研究者は、スウィフトのパートリッジ諷刺には強い宗教的・政治的意図があったことを究明した。すなわち、パートリッジは熱烈な非国教徒であったが、イングランド国教会の聖職者であったスウィフトからすれば、パートリッジは占星術を非国教徒の熱狂的な信仰と結びつけ、無知な人びとを煽って無秩序へと駆り立てるプロパガンディストであり、占星術師というよりはむしろ占星術を使って邪悪な目的を果たそうとする宗教的・政治的陰謀家にほかならなかった。「ビッカースタッフ・ペーパーズ」に通底しているのは、宗教的熱狂主義にたいする怒りと警戒心である。スウィフトは宗教的熱狂主義の跳梁を食い止めようとした。というのもそれは、血にまみれた政治的熱狂主義へと容易に転化してしまうと思われたからである。

スウィフトの諷刺文学を政治思想史的観点から考察した結果、彼の諷刺は非政治的な一般民衆の臆見や共通感覚を基礎としつつ、モラリズムと穏健な懐疑主義に立脚していること、スウィフトにおいて大事なことは、世界と人間を認識するにあたって熱狂とユートピア的幻想から目覚めていること、その政治的立場は中庸をとるがゆえに保守的であったが、人間と社会を見る目は理知的かつ冷静で、平衡と良識を備えたものであったこと、そしてそうした精神から生み出された諷刺は、実践哲学の要諦である説得の技術としてのレトリックを駆使しつつ、政治的賢慮概念をスウィフト的論理で展開したものであったことが明らかとなった。

(4) 以上の研究に続いて、オーガスタン時代最後の諷刺作家であるヘンリ・フィールディングを取り上げ、彼の諷刺作品において政治的賢慮概念がどのように展開されているかを考察した。分析対象としたテクストは、*An Apology for the Life of Mrs. Shamela Andrews* (1741) ; *The History of the*

Adventures of Joseph Andrews (1742)；*The Life of the Jonathan Wild the Great* (1743)；*The History of Tom Jones, a Foundling* (1749)である。

これらのテクストのなかでも、フィールディングの諷刺概念を把握するためにとくに重視したのは、宰相ロバート・ウォルポールの権力欲やパトロネージによる腐敗政治を批判した *The Life of Mr. Jonathan Wild the Great* である。この作品を綿密に読解しながら、フィールディングの諷刺文学における政治的賢慮概念の本質を探った。彼の諷刺における最も重要な言説は、「偉大さ」(greatness)と「善良さ」(goodness)であった。フィールディングは、利己心から生み出され、征服や勝利や成功のコロラリーである偉大さを、高慢さおよび残忍さをもたらすものとして排除しつつ、善を尊び善の社会的実践を説いていった。この場合の善良さこそが、賢慮の変容ないし展開形態にほかならない。フィールディングは自らの賢慮概念を諷刺作品のなかに盛り込む一方、それを法律や法制度の改正などの社会改革運動に具体化していった。研究者は、フィールディングの諷刺文学のなかに政治的賢慮概念の新たな展開を把捉し、彼の思想は実践哲学の伝統のなかに位置づけることができることを明らかにした。

(5) 近代イギリスの諷刺文学に関する研究は、従来そのほとんどが文学的観点からなされてきた。諷刺を政治的賢慮概念と関わらせて政治思想史的観点から考察したものは、わが国はもとより諸外国においても皆無であった。本研究課題は、イギリス政治史や社会史に関する最新の研究成果を取り入れながら、まったく手のつけられていない諷刺文学における政治的賢慮概念の展開を政治思想史的に明らかにしようとしたものである。そのさい、思想史研究の新しい方法論を採用し、１７、１８世紀の古典的テクスト、匿名のものを含むさまざまな諷刺作品やパンフレット類を取り上げて、歴史的コンテクストを重視しつつ丹念に読解した。そしてそれらから賢慮概念を析出し、その展開過程を系譜学的に跡づけながら、政治思想史における諷刺の実践的意味や価値を捉え直した。これは諷刺を政治思想の観点から再解釈し再評価しようとする従来にない新しい試みである。

今後の課題は、本研究課題の成果を踏まえながら、スウィフトやドライデンより前の初期近代イギリスの歴史のなかに政治的賢慮を探求し、実践哲学の水脈を捉えていくことである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計５件）

① 岸本広司、スウィフトとビッカースタッフ・ペーパーズ(二)、岡山大学法学会雑誌、査読無、59巻1号、2009、103-131

② 岸本広司、スウィフトとビッカースタッフ・ペーパーズ(一)、岡山大学法学会雑誌、査読無、58巻１号、2008、1-42

６．研究組織

(1)研究代表者

岸本　広司（KISHIMOTO HIROSHI）

岡山大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：20186216